

はじめに

私たちは、世界史を受験科目として選択し、慶應義塾大学の入試に果敢にチャレンジしようとする全ての受験生の皆さんに、この1冊の問題集を贈ります。

問題集の名は、「慶應大世界史」。

今、この問題集を手にとった皆さんの胸中には、難問に立ち向かっていかなければならないことへの不安と、合格に向かって果敢に突き進もうとする勇気とが複雑に同居していることでしょう。この問題集は、そうした皆さんの勇気に大いなる信頼を寄せて、いっさいの妥協を捨てるどころから出発して作り上げたものです。ただ小手先の受験テクニックに逃げるのではなく、また、教科書レベルを超えた難問を「悪問」として片付けるわけでもありません。この問題集のねらいは、近年の慶大の典型的な入試問題を題材に、教科書レベルを超えながらも慶大への合格をめざす受験生が押さえるべきポイントを皆さんに明示することで、皆さんが日頃の世界史学習を通して獲得した基本知識に磨きをかけることにこそあるのです。

この問題集では、皆さんの学習を効果的なものにするために、各ユニット(1～23)ごとに **Step 1・Step 2** の2段階の構成をとっています。

Step 1…近年の慶大入試より厳選した入試問題

Step 2…各テーマに関連した一問一答形式などの設問（おもに早慶大で問われたものより厳選）

それぞれの段階ごとに問題にチャレンジしていき、各 **Step** ごとの解説を参照することで知識の確認を図ることができ、また、解説の随所に登場する「ここで差がつく！」などの図表やコラムによって細かな関連事項を習得していけば、慶大への合格にぐっと近づいていけるはずです。また、本書の姉妹編である「早稲田大世界史」もあわせて活用すれば、さらに効果は上がるでしょう。

夢は叶うものではなく叶えるもの。やり遂げる勇気こそが合格につながるのです。千里の道も一歩から。志望大学への合格を「永遠の都ローマ」に喩えるなら、皆さんの進むべきすべての道は、必ずローマに通じていることでしょう。

さあ、皆さん、そろそろ始めていきませんか！ ここから先の道先案内は、私たちにおまかせください。皆さんの健闘を祈ります。

著者一同

目次

- 1 ヨーロッパ文化史Ⅰ（古代～中世）……6
- 2 ローマ帝国史……12
- 3 ビザンツ帝国史……18
- 4 中世ヨーロッパⅠ（キリスト教と世俗権力）……26
- 5 中世ヨーロッパⅡ（十字軍と中世都市）……32
- 6 ヨーロッパ文化史Ⅱ（中世～ルネサンス）……38
- 7 近世ヨーロッパ（主権国家体制）……45
- 8 ユダヤ民族史……50
- 9 中国史Ⅰ（近世東アジアの国際秩序）……57
- 10 中国史Ⅱ（文化史）……63
- 11 市民革命とナポレオン……68
- 12 産業革命とインド……75
- 13 ウィーン体制と国民主義……81
- 14 ヨーロッパ文化史Ⅲ（近世～現代）……87
- 15 帝国主義と社会主義……100
- 16 戦間期の欧米……109
- 17 冷戦の展開とヨーロッパの統合……116
- 18 アメリカ合衆国史Ⅰ（19世紀の政治史）……126
- 19 アメリカ合衆国史Ⅱ（移民の歴史）……134
- 20 ラテンアメリカ史……139
- 21 アジア近現代史Ⅰ（東南アジア）……143
- 22 アジア近現代史Ⅱ（中国）……150
- 23 アジア近現代史Ⅲ（朝鮮・台湾など）……160

◆解答◆

(a) 23 (b) 34 (c) 37 (d) 17 (e) 32 (f) 42 (g) 26
 (h) 07 (i) 24 (j) 46 (k) 43 (l) 39

◆解説◆

(a) 23 トリボニアヌスは6世紀のビザンツ皇帝ユスティニアヌスに仕えた法学者で、これまでのローマ法をまとめた「ローマ法大全」の編纂者として知られています。その多くはラテン語でまとめられていますが、新たに定められたいくつかの法はギリシア語でも記されています。その後徐々に帝国のギリシア化が進み、7世紀には公用語がギリシア語となります。

(b) 34 ヘラクレイオス1世は、7世紀のビザンツ皇帝です。イスラム勢力の侵入によりシリア・エジプトを喪失し、アヴァール人・スラヴ人にも侵入されるという苦境に直面した皇帝です。彼の時代に軍管区制(テマ制)・屯田兵制が導入されました。→(i)の解説参照(p.23)。

(c) 37 マケドニア朝はバシレイオス1世が創始した王朝で、9世紀から11世紀にかけて栄えました。この時期にビザンツ帝国は勢力を回復させ、バシレイオス2世の時代には、第1次ブルガリア王国を滅亡へと追いやっています。都のコンスタンティノープルは商業の中心として栄え、ノミスマ(金貨)が使用されるなど貨幣経済も発展していました。→(k)の解説参照(p.23)

ここで差がつく! — ビザンツ帝国の諸王朝と代表的な皇帝

テオドシウス朝 (395~450)

・ローマ帝国の東西分裂にはじまる、初代はアルカディウス

ユスティニアヌス朝 (527~602) …ユスティニアヌス帝 (最盛期)

ヘラクレイオス朝 (610~711) …ヘラクレイオス1世 (軍管区制, 屯田兵制)

マケドニア朝 (867~1057)

・バシレイオス1世…マケドニア朝を創始

・バシレイオス2世…「ブルガリア人殺し」の異名、第1次ブルガリア王国の征服

コムネノス朝 (1081~1185)

・アレクシオス1世…ローマ教皇ウルバヌス2世に援軍要請、十字軍の突換

ニケーア帝国 (1204~1261)

・第4回十字軍のラテン帝国建設にともない小アジアのニケーアで建国

・皇帝ミカエル8世がコンスタンティノープルを奪回 (ジェノヴァが支援)

バラエオロゴス朝 (1261~1453)

・オスマン帝国 (メフメト2世) によりコンスタンティノープル陥落、滅亡→(l)の解説参照

- (例) 04 ウェストファリア条約が成立した1648年ころに起こっていた革命ということで、ピューリタン革命(1642～49)を想起できれば簡単だったでしょう。
- (例) 21 1623年、アンボyna事件でイギリス勢力を東南アジアから駆逐したオランダは、翌1624年に台湾を征服します。その際の拠点になったゼーランディア城(安平城)もおさえておきましょう。1661年、反清復明運動を展開する鄭成功によってオランダは台湾から駆逐されました。→ユニット9のStep2(3)解説参照(p.62)。

Step 2

- (1) フェリペ2世時代にスペインがオスマン・トルコ海軍を撃破したが、このときスペインのほかにローマ教皇と、ある都市の艦隊も加わっていた。それはどこか。
(早大・政治経済)
- (2) ピューリタン革命期、ジェントリの家庭に生まれたリルバーンが改革を要求した多数のパンフレットを書いて指導した政治的集団は何と呼ばれたか。(慶大・法)
- (3) ピューリタン革命で王党派の軍隊を破った議会軍のなかで、クロムウェルが1643年に創設した部隊を何というか。(早大・政治経済)
- (4) 絶対主義国家の特色の一つに常備軍の設置があるが、ルイ14世に仕え、当時ヨーロッパ最強の常備軍をつくりあげた人物はだれか。(慶大・法)

◆解答・解説◆

- (1) **ヴェネツィア** ヴェネツィアは、1538年の**プレヴェザの海戦**でもスペインやローマ教皇とともに連合艦隊を組織しオスマン帝国と戦っていますが、この時は敗北しています。
- (2) **水平派(平等派)** ピューリタン革命において、貧農・職人・小市民・一般兵士などから支持されたグループで、普通選挙の実施や十分の一税廃止などを主張しました。中心人物はリルバーンです。クロムウェル(独立派)によって弾圧され、政治的な党派としては解体します。
- (3) **鉄騎隊** ジェントリやヨーマンを中心とする屈強なピューリタンの精鋭で組織された騎兵連隊です。王党派に対する議会議の形勢逆転の契機となった1644年の**マーストンムーアの戦い**での戦勝を機に「鉄騎隊」と呼ばれるようになりました。1645年にはこの鉄騎隊をモデルに議会派軍が編成され(新型軍の創設)、**ネーズビーの戦い**で決定的な勝利を取めることとなります。
- (4) **ルーヴォワ** ルーヴォワ(1639～91)は、ルイ14世の隆相を務めた政治家で、軍制改革を実施して軍規の正しい30万の常備軍を創設しました。ルイ14世の親政期の政治家としては蔵相**コルベール**が有名ですが、ルーヴォワは彼の死後にルイ14世の最高顧問となった人物でもあります。